



TITLE:

静脩 Vol. 5 No. 4 (1968.11) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 5 No. 4 (1968.11) [全文]. 静脩 1968, 5(4)

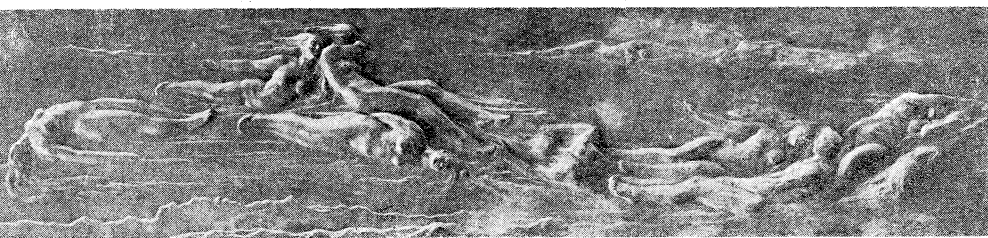
ISSUE DATE:

1968-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65927>

RIGHT:



## 我が蔵書の一冊

会 田 雄 次

学生時代、卒業論文にイタリア・ルネサンスをえらぼうと決心したときである。フォイトという人のヒューマニズム研究の上下二巻本を手に入れるかどうかに運命がかかっているような気がして来た。それも初版のは大したことはない。大変な名著といわれるのは三版であってページ数も三倍ぐらいにふえている。京大図書館にもないようだ。教授に願って東大に当たってもらったのだが、やはりない。先輩のルネサンス研究者で蔵書家として有名な塩見高年さんも初版本しか持っていない。大類伸先生さえ所持して居られない。

こうなると意地のようなもので、私はどうあっても、その三版物を手に入れようと決心した。ところが、たまたま送って来たグスタフ・フォックという古本屋のカタログを見ると、何とも簡単にその書名が出ているではないか。この本屋さんは当時東京に支店を出していた。こおどりにして早速注文した。学生は親のすねかじりだからのんきなものだ。それにあわてたためもある。うかつにも値段のほうを充分たしかめずにである。

1月ほどして本が送られて来たが、その請求書を見て私は青くなった。たしか375円だったと思う。昭和12,3年のことだから今日でいえば優に20万円以上の価値だ。驚いてよくよくカタログを見て見ると、たしかに300何マルクとある。私は零を1つ見落していたわけだ。それにちゃんと絶版で稀覯本と銘うってもある。私はおそるおそる父のもとへ出頭し、事情を説明した。父もさすがにウーンとうなったが、やがてにやりと笑って、よかろうと言だけ答えてくれた。よっぽど私が情けなさそうな顔をしていたからであろう。こうして私は偶然にも、この書を自分の蔵書に加えることができたのである。さて自分のものとなって安心してつくづくながめてみると、私製本らしく、いかにも20世紀初頭らしい手のこんだ装丁がしてあり、蔵書票もはってある。そんなのが持てたと思うと自分も一人前のような気がしてくるから、そういうところに蔵書の効があるのだろう。もっとも、内容はやけに細かい研究だ。大学の卒業論文程度ではとても活用とは行かない。第一むつかしくて完読することなど不可能。やむを得ず1部を引用したにとどまった。

それからもう30年以上の年月を経た。私自身ルネサンスに関しては多少の本を集めはしたが、これ以上高価な買物をしたことはない。集めた本も別に珍本というものもなく、ただ集

っていることでやっと価値が出て来たと自負できるにすぎぬ。日本で、おそらくは自分1人しか持っていないだろうなどと自慢できる本は、このフォイグトのもの1冊ということになる。世の中には途方もない本を持っている人も多いから、もち論安心はできないが、この本は小説や詩ではない。ごく地道な研究書だ。そんなものに興味を持つ人は限られているはずである。

しかし、考えて見れば情けない話だ。一応専門の研究者というものになっているくせ、所持する専門書の中で父に買ってもらった本しか自慢できるものがないのである。30年ちかく教師をしていて、自力では1冊もそれを凌駕するものが買えなかったとはである。とりわけ、それが資力の問題でないことが一番つらい。実は、それ以後読みたい本があっても、それを発見しようという努力をしなかったということなのである。いいかえれば、学生時代ほど学問に集中しなかった、研究意欲が低下する一方の30年間という証明にもなりそうだ。何とかして、もう1冊ぐらい珍しいものを手に入れてやれという気にもなろうというものである。もっとも、そういう心がけではとてもよいものは手に入りそうもないし、それでは安心立命できるわけでは到底ないのだが。

(人文科学研究所教授)

### 寄贈図書の評価基準まとまる

従来部局間で不統一であった寄贈図書の評価基準をこの際統一して、少しでも業務合理化の一助にしたいという趣旨から本館と部局図書室の間で検討していたが、このほど評価基準製がまとまったので解説してみたい。

この評価は時価で行なうのがたてまえであるので、基準算定の方法として和書については出版年鑑1968年版によって主題別、版型別と社会・自然系に分けて約350冊を抽出した。また洋書、中国書等は現物に当て調査し、1ページ当たりの単価をそれぞれ算出し、それを根拠にして作成されたものである。

この表をみればわかるようにやはり人文社会系と理工系とでは価格上ひらきがあって大判になるほどその差が大きいこと。洋書のうち、英・仏書はほぼ等しいが、ドイツ書はやや高い。中国書には北京版、香港版、台湾版がそれぞれ少し価格差があることなどがうかがわれた。

この基準表はただ評価の一つの目安と考えるべきで、個々の図書の特殊性に応じて評価額を適宜しんじやくすべき場合もちろんあるが、現時点での一応の基準を示すものと考えられる。

昭和43年9月

区 分	和 書		洋 書		中 国 書		備 考
	社 会	自 然	社 会	自 然	平装本	精装本	
A 6	1 円	1 円	円	円	1 円	2 円	ロシア語は 和書に準ずる
B40	1	1					
B 6	2	3	3.5	5	1	2	
A 5	3.5	5	7	10	1.5	3	
B 5	6	6.5	10	14	2	4	
A 4	8	10					

(注 ページ単価)

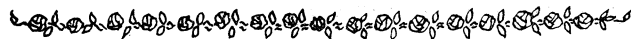
~~~~~ 一言・ふたこと ~~~~~

コンピューター、図書館、ゼロックス。三題話のようなが、いずれも私の研究生活に欠かせないもので、しかもかならず誰か専門家の手に依存している。そこによく言われるユーザー側とサービス側との関係がある。考えてみればユーザーとしての私はかつてな注文をする。計算結果を早く出してくれ、ゼロックスをすぐやってくれ、登録に出した本が何箇月も戻って来ないのは困る、等々である。何年か研究室に居ると、受入れ側の事情もある程度わかるだけに、自分の研究上の必要性和板ばさみになることがしばしばである。そこで思うのだが、両者の協力で改善できることはないであろうか。例えば

ユーザーとサーヴィサー  
 双方向の通信

きは、季節によって所要日数に非常に差があるようだ。このラッシュを時差出勤の要領でさばけないだろうか。そのためには、いつがすいているかのPRが必要になる。他にもいろいろの問題があるろうが、もっとお互いのコミュニケーションを密にすることで、この限られた人員と予算のわく内でのベストを見出したいものである。「静脩」ではユーザーに比べてサービス側の発言が少ないように思う。目標を持ちながら手段のわからないわれわれユーザーに対して、積極的に知恵を貸して頂くことをお願いしたい。

(工学部講師 鷹尾和昭)



日本農業の実証的な研究を行っている私にとって、最近、痛切に感じるものが2つある。ひとつは、戦後、ここに数年間、官庁統計が多分野にわたって発表され、その内容が豊富化されつつあること。もうひとつは、戦前の資料は現在にくらべずっと豊富に図書室に整備されていることである。実証研究を旨としている私にとって、統計資料は研究の生命源であり、それが豊富に発表されることは何よりうれしい。しかし、学部資料室には戦後の農業センサスや工業統計といったもっとも基礎的なデータでさえ完備されておらず、近年、20余種も発行されている白書類は、数種しか購入されていないというのが現状である。この現状では、

図書費の不足に思う  
 経済学部の場合

状態を放置するならば、今後、統計の発行数が増加するにつれて、基本統計でさえ入手できないものが続出するであろう。

日本経済の高度成長がうたわれてから10数年、急速な生産力の発展によって国民総生産は資本主義諸国内で第2位になったという。こんな時代に、全国300余大学の全学部で官庁統計を無料で配布するといった簡単なことが、なぜできないのだろうか。大学院生を含めて研究者が必要とする書物や資料を自由に購入できるだけの図書費が、なぜ保障できないのだろうか。乏しい図書費までが年度末に近づくと数%削減されるという昨今、ここらでこの悪癖を立ち切るよう努力しないと、将来、本学の図書歴史に大きな禍根を残すことになる。

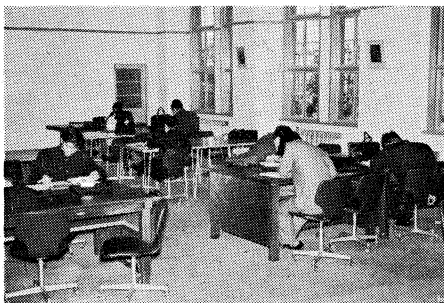
(経済学部大学院 中野一新)

# 図 書 館 だ よ り

ご 存 知 で す か

## ○第二閲覧室スタート ―雑誌利用の窓口一本化をめざして―

附属図書館の長い間の懸案であり、学生諸君の強い要望でもあった第二閲覧室が9月26日、開設の運びとなった。現在はまだ暫定的な措置として、古い机が利用されており、雑誌コーナーに備えられた雑誌のタイトル数もごく少数であるが、備品等が完備し、閲覧室が最終的に完成された段階では、座席数も約120席あまりとなり、少なくとも1,200種の雑誌が展示される予定である。第二閲覧室が開設された目的は、現在の大閲覧室の収容能力



がすでに限界に達しているため、その混雑を緩和するためと、情報量の増大とともに、とみにその比重を増しつつある逐次刊行物の役割をフルに発揮させるため雑誌関係の閲覧をすべてここで行ない得る態勢を作ることにある。現在、第二閲覧室の静かなふんい気を愛する利用者が日増しに多くなっている。より一層ご利用いただければ幸いである。

## ○「学内図書相互利用書」の様式を統一

近年における学術研究の発展は、研究分野の細分化、総合化をもたらし、その結果、研究者が必要とする文献や資料は急速に増加する一方、関連する分野も極めて広範囲に及んでいる。このような情勢の中で、本学のような総合大学では、専門の学科間ないし部局間の図書相互利用の促進と、その円滑化がとくに要請されることはいうまでもない。

附属図書館では、部局からの要請にもとづき、さる7月10日開催された附属図書館商談会に、「部局間の図書相互利用の促進」についてはかった結果、その推進方について了解が得

られたので、その後、各部局の図書掛長と協議を重ね、このほど、「学内図書相互利用書」の様式を作成した。

この試みは 従来、特定の部局だけが個々に発行している様式を統一して、部局間で相互に活用することにより、今後の相互利用の促進に役立てることを目的としている。

この様式による手続きとしては①利用者は、自己の所属する部局または学科の図書室に相互利用の希望を申し込み、②図書室は、相手方の所蔵部局の図書室あて電話照会により、文献の所在や利用方法を確認した後、③利用者はこの様式を持参して相手方の部局図書室に提出する。利用許可の判断は、部局の利用規則や内規等により、部局の事情の許される範囲内において決定される。

| 図書相互利用書 京都大学附属図書館           |     |       |             |     |       |
|-----------------------------|-----|-------|-------------|-----|-------|
| No. _____                   |     |       |             |     |       |
| 昭和 年 月 日                    |     |       |             |     |       |
| 図書室御中                       |     |       |             |     |       |
| 図書室名 _____                  |     |       |             |     |       |
| 掛員 _____                    |     |       |             |     |       |
| 下記の図書を借用いたします(但し貴図書室の規則による) |     |       |             |     |       |
| 借用日                         | 年   | 月     | 日           | 返却日 | 年 月 日 |
| 借用者名 _____                  |     |       |             |     |       |
| 所属                          | 身分  |       | 学内TEL _____ |     |       |
| 現住所                         |     |       | TEL _____   |     |       |
| 誌名 _____                    |     |       |             |     |       |
| Vol.                        | No. | ( 年 ) | P.          | ~P. |       |

## 資料紹介

## 外国雑誌便覧 全5巻 (日本読書協会編)

最近、国際間の動向は常に激しい変動を示し、これに対応して、実情を適確に、はあくすることが困難になりつつある。必要な情報を迅速かつ確実に入手するために、雑誌の役割は欠かせないものがあるが、世界各地で発行される膨大な数の雑誌をほぼ体系的に紹介した資料はいままでなかった。その意味で、こんど日本読書協会から刊行された外国雑誌便覧は、読者に多くの便宜を与えらるゝと思う。内容は、全5巻を英米語中心の'67外国雑誌便覧、1巻の外に、残り4巻をそれぞれ、ソ連・東欧、ヨーロッパ、アジア・アフリカ、ラテン・アメリカの各編にふり分け、逐次出版される予定である。いままでに'67外国雑誌便覧とソ連・東欧編の2巻が出版され、図書館に購入されている。各巻の収録タイトル数は、平均して約800で、各誌の発行回数、創刊、価格、発行所及び簡単な内容を紹介している。

**Internationale Titelabkürzungen** von Zeitschriften, Zeitungen, wichtigen Handbüchern, Wörterbüchern, Gesetzen usw. Osnabrück 1967 (世界学術雑誌略名辞典)

学術雑誌、新聞の略名表は、自然科学系では各科さまざまに存在するが、本辞典のように人文、社会、自然科学の百科にわたるものは珍しい。編集者 Leistner の自負するように、1927年 Rust の略名表出版以来であろう。省略法にも、古くは国際連盟のそれ、近くは ISO (International Organization for Standardization) の推すもの、あるいは各国自然科学系の権威誌が定めた方則などがあるが、本辞典はなんら方則にとらわれることなく、自由に世界の略名表より、約40,000タイトルを収録している。その結果同一雑誌が5様に略語化されて混在、一見不統一とも思われるが、これこそかえって利用者にとっては懇切な編集といえよう。即ちファウスト前曲の「数多く出せばそれだけ多くの人がなにかを得る」というわけである。

なお、現在部局図書館では下記の権威誌の巻頭(又は巻末)にかかげる略名表を使用している。

経済学文献季報(経済)

Index medicus(医)

World list of scientific periodicals(農)

Chemical abstracts(薬)

Mathematical reviews(数研)

## 教官文庫

- 「夫婦の法律」太田武男(人文科学研究所助教授)著 有斐閣 昭43.  
 「燃料分析試験法」舟阪渡(工学部教授)編 南江堂 昭43.  
 「化学と電子計算機」米沢貞次郎(工学部教授)大崎健次(薬学部教授)編 南江堂 昭43.  
 「新修 京都叢書」第4,10. 野間光辰(文学部教授)編 臨川書店 昭43.  
 「放射線遮蔽入門」兵藤知典(工学部教授)著 産業図書 昭41.  
 「地中海世界史」井上智勇(文学部教授)著 清水弘文堂 昭43.  
 「日本法学の歴史と理論」北川善太郎(法学部助教授)著 日本評論社 昭43.  
 「政治と犯罪」エンツェンスベルガー著 野村修(教養部助教授)訳 晶文社 昭41.  
 「マルクス」コルシュ著 野村修(教養部助教授)訳 未来社 昭42.  
 「ヨーロッパ労働運動史」アーベントロート著 野村修(教養部助教授)訳 合同出版 昭43.  
 「ボルシェヴィズムの歴史」ローゼンベルク著 野村修(教養部助教授)訳 晶文社 昭43.  
 「無限、宇宙と諸世界について」ブルーノ著 清水純一(文学部助教授)訳 現代思潮社 昭42.  
 「ヨーロッパの意味」シャポー著 清水純一(文学部助教授)訳 サイマル出版会 昭43.



### 基礎物理学研究所図書室

大学構内の北のはずれにある、小じんまりした白い建物が、基礎物理学研究所である。前身は、現所長の、ノーベル賞受賞を記念して設立された湯川記念館で、その後、わが国最初の共同利用研究所として出発した。

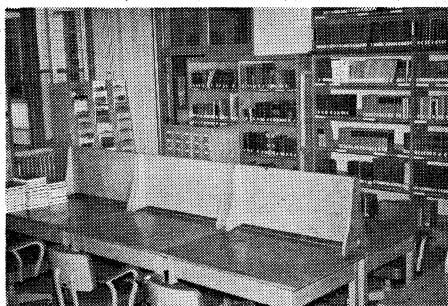
図書室はその2階にあり、事務室、閲覧室及び書庫からなっていて、職員は3名である。閲覧室の窓からは、植物園の緑と、四季おりおりの大文字山がながめられ、恵まれた自然環境である。現在の蔵書数は約13,000冊で、共同利用研究所の性質上、利用者が学内だけにとどまらず、全国の基礎物理学研究者に開放されている。

この図書室の特徴の一つとして、幅広い収集方針があげられるだろう。蔵書構成は科学史関係から生物物理などの境界領域の分野にまでわたっている。それは、研究目的が物理学の中でも、理論分野であるため、何よりもまず、図書、専門雑誌の整備に主力がそそがれるためであり、またそれを裏

づける予算にも恵まれているからである。

購入及び交換、寄贈により受入れられる雑誌の数も、200種類以上になる。これもまた、理論物理の分野から応用分野にと広範囲にわたるので、他学部からの利用者も相当の数になっている。特に利用度のたかい図書及び雑誌は、2部ないし、3部の複本をそろえる方針で、研究活動に支障のないよう考慮されている。

ところで、多少歴史をもつ図書室の例にもれず、ここでもスペースの問題に頭を悩ましている。現在書庫は3ヶ所に分かれており、いずれも、収容力の限界に達している。資料の分散は利用上非常に不便なことである。利用者も、掛員も、時間と労力をむだにしていることになる。現在、この問題を解決するのが一つの課題であり、応急処置ではなく長期的展望のもとに改善の必要を感じさせられている。



あとがき 校庭のいちょうも黄色くなり燈火に親しむころとなりました。

今夏から壁の塗り替えにつづいて、床張りとも図書館の内装もようやく完成し、明るいふんい気になりました。今冬からはスチームが設置されて暖かい、快適な閲覧室が皆様を待っています。外観が美しくなるとともに、図書館の内容も皆様のご意見を聞かせていただき、ともに歩みよつてどのようにすれば一番利用されやすく、お役にたてるかと考えています。「一言・ふたこと」欄に利用者に対して図書館からのアプローチが足りないのご指摘がありましたが、編集子もこの欄に対するサービス側の声を載せることができればと、また、図書館のPRに役立つように「図書館だより」を利用していきたいと思っています。

コンクリートの大きな岩石のように見える図書館でも“たたけよ、さらば開かれん。求めよ、さらば与えられん。”一度門をたたいて下さい、そうすれば無限の宝庫のとびらは開かれて富は皆あなたのものです。ちょっとおおげさですがそうありたいと思っています。これから最後の学期に近づきますが卒業論文作成などにお忙しい事と思います、せいぜいご利用下さい。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 5, No.4 (通巻25号)1968年11月15日発行・編集発行人：  
岩瀬敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111(内線)2220~2238